

国境なき教師団

●カンボジアの
教育支援に
関わって



カンボジアの 教育の再生には どのような支援が 必要なのか

金森 正臣 ●愛知教育大学名誉教授

CIESFカンボジアオフィスの代表



●カンボジアの
生き生きとした小学生
<撮影>CIESF松倉

カンボジア国際教育支援基金(CIESF)は、カンボジアの復興と国民の生活の安定を願って、二〇〇八年十月に日本国内で結成された一般財団法人です。二〇〇九年十月には、カンボジア政府から認定された国際NGOになりました。カンボジアの教員養成所の支援をするために、リタイアされた日本のベテランの先生のボランティアによって実施しています。ほかにも社会の安定のために、企業家の養成や、教育大学院の設立を目指して日本とカンボジアで活動しています。

カンボジアは、東南アジアのインドシナ半島にある、日本の半分ほどの面積の国です。人口は、日本の十分の

この間、一九八〇年には、学校教育の復活が始まりました。しかし、ほとんど先生がいない状態で、字を書ける人を探して先生になってもらったと言います。現在でも教える先生の学力が、日本の中学生の半分ぐらいと推定されます。このため、基礎教育の程度が極端に低く、教育の再生に多くの困難があります。まるで教育破壊の実験場のように、私も理解するのに数年を要しました。

特に現在の世界状況の中で国造りには欠かせない、理科の教育が遅れています。原因は二つあり、フランス時代には、植民地に必要な人材の教育が主体で、一般国民の教育は重要視されず、寺小屋に任ざられていました。このために、理科・数学科などはほとんど力が入れられていなかったことです。第二には、一九七〇年にロンノル政権になると内戦状態になったために、教育は十分でなく、さらにポルポト時代が追い討ちをかけることになりました。

例えば、難しい式を教えている先生が、物差し・分度器・はかりなどをほとんど使えなかったりします。これは小・中・高・大学のどの先生でもほとんど同じです。

一ぐらいです。かつては東インド会社が、この国の香辛料や絹を求めて、植民地化しました。カンボジアがフランス植民地時代には、高い教育のレベルを誇り、フランスの大学に合格する人も少なくなかったと言います。シアヌーク王が、一九五三年にフランスから独立を果たしました。その後、一九七〇年になるとロンノル政権がシアヌーク王を国外に追放して内戦状態に入ります。一九七五年から一九七九年まで政権を握ったポルポト派が、先生や僧侶、知識人を多量に虐殺したことによって、教育がほとんど崩壊しました。一九九一年のパリ和平協定まで、内戦状態で国内の混乱が続きました。

目盛りが、一ミリならよいのですが、二ミリ、五ミリの目盛りなら、読めない人が数割出ます。内戦時代から教材がほとんどなかったために、使った経験がないようです。グラフなどに関しては、ほとんど書けない状態です。小学校の先生も小学校教員養成所(日本の短大に相当する)の先生も、入学してきた小学校一年生に算数の足し算を教えるのに、順序があることをまったく理解していません。

日本なら一桁の繰り上がりのない足し算、繰り上がりのある足し算、二桁の足し算とやさしいほうから段々と難しい計算へと進むのが普通です。しかし、カンボジアでは、みなやさしいから同じだと言う答えが返ってきます。教育の再生には、基礎教育の充実が何よりも不可欠です。

そのためには、学校建設などのハード面だけでなく、日本から経験豊かな専門家を長期間派遣し、カンボジアに合った教育の支援を見つけ出し、地道な努力でレベルを上げて行くことが不可欠で、「国境なき教師団」という取り組みです。